



第2部

<<テーマ>>

「万博への市民参加と地域づくり」

<<パネリスト>>

鈴木 公平（豊田市長）

加藤 梅雄（長久手町長）

榎田 勝利（愛・地球博ボランティアセンター経営企画委員長）

小川 巧記（2005年日本国際博覧会協会市民参加プロデューサー）

（木村）

このセッションでは、市民参加と地域づくりに光を当ててみたいと思います。博覧会における「市民参加」という言葉は、特にハノーバー博覧会から強調されるようになってきましたし、今ではもうメガ・イベントにおける市民の活動が当たり前のような、そういう風潮さえ出てきています。「市民参加」という言葉は、いかにも市民、普通の人々が事業の主人公になるという意味ではとても素晴らしいことなのですが、そのような言葉どおり、本当に私たちの市民参加が動いているのかどうか、そういうあたりに少し問題があるのかもしれない。

現実には、「市民参加」という名前の大衆動員であったり、安上がりの労働力であったりということが今でも少なくありません。今回の愛知万博では、「ボランティア」という言葉が随分、市民権を得るようになりましたし、多くの人々がその善意でもって博覧会を支えたというような評価もできるのではないかと思います。ただ、その一方で、そのような市民参加の在り方を、もう一度ここできちんと再点検をしておくことも、これからの市民参加型社会を考えるうえで必要なことではないかと思います。

まずそのあたりを、今回の博覧会を支えてこられた市町それぞれの、豊田市、長久

手町と、それからボランティアセンター、さらには市民参加をプロデュースしてこられた小川巧記さん。そもそも、市民参加をだれかがプロデュースするという発想が、本当にそれでいいのかという気持ちが、ちょっと疑問として残っていないわけでもないのです。しかし、とにかく大変精力的に市民参加をプロデュースしてこられた、博覧会協会の小川さんにご登壇を願っているわけです。まず、その小川さんから、この体験を通してビビッドなお話を聞かせていただきたいと思っております。

具体的な話を始める前に、小川さんから、そもそも愛知万博への市民参加とはどのようなものだと思って、プロデューサーとしてお考えになったのかということ、ごく簡単に、非常に難しい問題を簡単に言えというのは大変ですが、簡単をお願いします。



（小川）

「市民参加」という言葉は、ご存知のように、この20世紀の後半あたりから非常にたくさん使われだしてきました。あらゆるものに「市民参加」という事が出てきますが、今、木村先生が言われたように、あるときは動員の手段になったり、あるときは安上がりの手足になったりと、特に博覧会、日本で行われた地方博では、ちょっとはっきりした言い方をすると、コンテンツの穴埋めのように使われた事もあります。

そういう中で、今回私たちは、愛・地球博で史上初めての本格的な市民参加を実現しようと言っております。そのようにはっきり言えるところは何かというと、先ほど



のお話にもあったように、ハノーバー万博からの流れの中に、NGO、NPOの参加というものがありませんでしたが、ただ既存組織の活動発表だけではなく、それをさらにもっと個人の参加まで含めた形で、市民のプラットフォームを作ろうというのが今回のねらいだからです。そもそもなぜ万博に市民参加なのか、そしてまたなぜプロデューサーが要するのかというところを、ちょっとだけご説明させていただきます。私は万博の学問をやっているわけではありませぬので、私見で申し訳ないのですが、私は万博というのは、「時代のエンジンを見せるショールーム」だと思っています。

万博は、ご存じのように19世紀に始まりました。1851年、第1回ロンドン博、当時19世紀というのは、まさに帝国主義の時代であり、国というものが、世界を作っていた「時代のエンジン」だったと思うのです。ですから、万博はまさにその国の力を見せるショールームでした。各国の産業革命の成果として、国の力を見せ合い、競い合い、それを大きく世界に伝えていった、そういう万博が19世紀にされたのではないかと。

そして、20世紀、特に戦後社会に入って、時代のエンジンは国から企業へと移りました。大量生産・大量消費という巨大なメカニズムを持つ企業が、世界を創っていった。まさに時代のエンジンは企業であった。ですから、先ほど基調講演でもありましたように、ニューヨーク博から始まり、そして大阪万博に至る万博は、企業のパビリオンがものすごく花開いていったわけです。まさに企業の力を見せる産業博が展開された。これが20世紀の万博ではないかと思いません。

もし万博が、本当に時代のエンジンを見せるショールームであるのなら、19世紀は国でした。20世紀は企業。では、21世紀初めてのこの愛・地球博においては、21世紀の時代のエンジンを見せなければ、21世紀の万博とは言えないと思うのです。そう

いう意味で、では21世紀の時代のエンジンは何かと考えたときに、私は、それが「市民」ではないかと考えました。つまり、普通の生活者です。あるいは「個人」と言ってもかまいません。つまりユーザーです。この時代と地球と一緒にユーズする、そういう個人こそが、この21世紀の時代のエンジンとなるのではないかと。そして、その時代のエンジンこそが、地球的な課題、今私たちが本当に一緒に抱えている課題を解決するエンジンになるのではないかと考えまして、21世紀最初の万博であるならば、まさにこの21世紀の時代のエンジンの市民個人の力を見せる万博でなければならぬと考えて、このプロジェクトを展開したのでした。

(木村)

ありがとうございます。時代のエンジンを見せるのだと。では、そのエンジンは何だったのだという話ですね。私たち市民が、どんな形でそのエンジンとして、次の世界を作っていくのか。これは手回しなのか、時々ガス欠をするのか、いろいろなことが起こると思うのですが、それでは具体的にどのような展開があったのか、博覧会場の外から話を始めたいと思います。

まず、開催都市の一つである豊田市からご報告をいただきたいと思うのですが、最初にお尋ねしたいのは、「一市町村一フレンドシップ事業」、これは県がずっとやってこられたことですが、その経過を含めて、豊田市ではどうであったのか。それから、豊田市ではフレンドシップ事業以外にも、たくさんの市民参加の仕掛け・仕組みをお作りになりましたが、その話も聞かせていただきたいと思ひます。

豊田市における今回の市民参加活動全体、さらにはその結果市民に生じた変化というものもあれば、ぜひお教えいただきたいと思ひます。豊田市長の鈴木公平さん、どうぞよろしくお願ひいたします。



(鈴木)

豊田市の鈴木です。豊田市は外国人が非常に多く住んでいる町であることと、もちろん自動車産業のメッカというか、トヨタ自動車の本社の所在地ですので、外国からお越しになるお客様が非常に多い都市でもあります。そんなことから、外国の方々日本人というか、豊田市民が共生するまちづくりというのが、前々からの豊田市のまちづくりの一つの方向でもありました。そういうこともありましたので、今回の博覧会はぜひ良いチャンスとして活かしたいと。さらにそうしたことが進んでいくようなきっかけにしたいという思いで取り組みました。

(以下スライド併用)

まずフレンドシップ国ですが、当初、豊田市は4か国ということで決まったのですが、4月1日に6町村と合併をしましたので、ここにありますように、合わせて10か国(フィンランド、カザフスタン、メキシコ、ネパール、パプアニューギニア、韓国、ロシア、スリランカ、英国、米国)のフレンドシップ・ホストシティとして、いろいろな取り組みをしました。

事業につきましては、市民を中心にして、フレンドシップ事業推進委員会を立ち上げていただきました。実行委員会が中心となって、それぞれの国々との交流を、それぞれの国の領事館・大使館と連携して取り組んでいただきました。

事業のコンセプトですけれども、四つに分けて申し上げたいと思います。

一つめは「国際理解」の視点で、相手国

をよく知る。併せて、豊田市なり日本をしっかり紹介しようということでした。

二つめは「市民参加」、特に子供たちを中心にして、市民が主役となって、事業を展開してもらおうということでした。

三つめとしましては、相手国と連携して、なおかつお互いにそのメリットがあるような、国際協力につながる事業に取り組もうではないかということでした。

四つめは、先ほどからもお話が出ていますが、博覧会後も継続できるような事業をできるだけ選別をして取り組もうということでした。

少し内容を申し上げたいと思うのですが、最初の「国際理解」という事業については、「パネル展」とかささまざまな紹介活動を行いました。併せて、「フレンドシップ給食」ということを行い、学校でそのお国の料理を、給食という形で子供たちに味わってもらいました。また、各国の文化などをさまざまな形で紹介するカウントダウン・イベントを2回行ったわけですが、2万5000人ほどの市民が参加して、大いに盛り上がりました。

市民参加事業は幾つかありますが、簡単に申し上げます。

一つは、ナショナルデーに小中学生が参加し、国歌斉唱や演奏などさまざまな活動をさせてもらいました。これは10か国それぞれにありました。

それから、市内には少年少女合唱団をはじめさまざまな団体がありますが、ジョイント・コンサートを行ったり、あるいは外国の合唱団としてナショナルデーに参加された方々に市内でホームステイを体験していただいたということがあります。

国際協力については、スマトラ沖地震とか、先だってはハリケーンでアメリカでは被害を受けられたわけですが、市民ボランティアが中心になって義援金を募集して、すでにお届けをさせていただいたという事業にも取り組んでいます。

事業をどう継続していくかということ



すが、フレンドシップ事業をきっかけにして、英国や韓国、パプアニューギニアにおいては、小中学校と新たにメールの交換や絵画の交換などの事業も始まっています。

イギリスからは、パピリオンのところ、イングリッシュ・ガーデンが設営されていますが、終わったら、あれを豊田市にご寄贈いただけるということですので、市内の公園でイングリッシュ・ガーデンを再現させようと考えております。

また、アメリカについては、アメリカハナミズキという木がありますが、これをアメリカ館のスポンサー企業からご寄贈いただきましたので、公園に植樹をし、今回の博覧会の記念として、整備をしていきたいと思っております。

市民活動にどのような変化が見られたかというお尋ねがあったわけですが、先ほどから申し上げておりますように、博覧会の成果の一つに、国際交流団体、学校、企業と各国の大使館・外交官、あるいは外国企業との新たなネットワークが構築されたことがあると思っております。

この写真は、8月にアメリカ館で、4か国の領事館やパピリオン関係者とフレンドシップ事業推進委員が交流したときの写真です。こうしたネットワークを通じて、民間レベルの国際交流が続けられるように支援していきたいし、続いていくと思っております。

急速にグローバル化が進んでいく中で、今回のこのフレンドシップ事業は、あらためて環境問題や経済活動など地球規模のできごとが市民生活と直結していて、それらの課題解決には国際理解と協力がいかに重要かを理解する絶好の機会になったと思っております。

冒頭にも申し上げましたが、市内には大変多くの外国の方々が住んでおられますので、こうした方々との共生社会づくりということで取り組んでいます。外国人と共生できる地域社会になっていくようないろいろな事業に、市民がまた主体的・積極的に

参加してくれるのではないかと考えております。

フレンドシップ事業以外にどんなものがあったかということですので、簡単にかいつまんで申し上げたいと思います。

まず、2005年愛知万博豊田地区推進協議会があります。これは商工会議所を中心として、市民、企業、あるいは各種団体で立ち上げてもらいまして、2234名の会員により、いろいろな活動に取り組んでいただきました。

それから、「フラワーロード事業」を行ってしまして、これはぜひ町の景観をよくしたいという思いの中で、花をツールにして町を少しきれいにして、お客様においでいただくのに温かくお迎えをしようということです。とりわけ、メインロードを中心として花壇やプランターを設置する事業を、これは市民ボランティアでやっていただきました。

「花ウェルカム事業」も同様です。これはスポット的に主要箇所について行いました。

それから、市民参加事業として「花のあるまちづくり運動」を展開し、これはありとあらゆる場所ですが、公共空間も含めて、あるいは個人の家庭も含めて、花作りを積極的に取り組んでもらおうということで行ってまいりました。これは現在も続いております。

それに併せて、「全日本花いっぱい豊田大会」を開催しました。これは全国及び市内から450団体50,000人の方々にお集まりいただき、花のあるまちづくり機運の盛り上げを図りました。

次に、「愛・地球博推進とよた市民事業」があります。これは市民が主体的に事業を企画して実施するというで行っていただきました。例えば、日本語と英語併記の観光ガイドマップを作成したり、自らボランティア・ガイド・ツアーを実施するというグループなど、さまざまな方が参加し、活動していただいております。



また、別のグループではせんてい枝（枝をせんていしたもの）や伐採した竹、竹が今環境的に大変問題になっているのですが、そうしたものをチップロードやマルチング材として活用するということが、多彩な事業が市内のさまざまな場所で、市民の手によって展開されました。平成 14 年度に 11 団体であったのが、平成 17 年度は 25 団体に増加しております。

それから、ボランティア事業です。豊田市は博覧会場になっていますが、実はパビリオンがありません。博覧会協会の会場位置表示は、瀬戸会場と長久手会場になっていて、豊田会場というのはありません。そこで、「万博八草駅」ターミナルにサテライト会場として豊田市を紹介したり、あるいはボランティアの方々に活動していただく拠点にしようということで、豊田市インフォメーションプラザを整備しました。今、たくさんのボランティアの方々に、このインフォメーションプラザを拠点にして、観光案内や高齢者・障害者・外国人へのサポート活動などを行っていただいております。

幾つかありますが、時間がありませんので話はこのあたりにしますけれども、フラワーロード事業では 400 近い団体や事業所の協力により、延べ 30km の道路が花で飾られました。

市民事業については、年々参加団体も増加していて、いい意味で競争というような関係も生まれていますので、レベルアップも図られていると思っております。

ボランティア事業については、八草ターミナルの利用者への対応や花のもてなしということで、大変好評をいただいていると聞いておりますし、ボランティア間の交流促進、ネットワーク化、人材バンク化が図られたとも聞いております。

以上、ご紹介しましたように、愛・地球博を契機として、さまざまな形態で市民のまちづくりへの参加促進が図れましたので、今後も是非継続、定着化をめざしていきたいと思っております。

ありがとうございました。

（木村）

ありがとうございます。市民参加の形はいろいろあるだろうと思います。そして、一つ一つは決して大きくない、本当に足元で、地元でささやかに行われているものの積み重ねだろうと思います。しかし、最初は「博覧会がやってくるから、みんなで何とかしようよ」という形で始まったものなのかもしれませんが、それがだんだんと地域の活動として日常的にやる活動、「博覧会のために花を植えてきれいにしようよ」ということから始まったとしてもいいと思うのですが、それがその次のステップとして、「この町をもっときれいにしようよ」「この町を我々のために」という視点で、また次のステップが大きくなっていく。そういう形でこれからも持続されていくなという実感を少し、お話を聞いていて持ったわけです。

ボランティアというのは、お手伝いではないのですね。自分たちの生活をどう変えていくかという自主的な事業だと思えます。そういう意味では、豊田市の市民の方々も自信を持たれた。今日、冒頭からずっと続けている、地域の人々が自信を持って動くということへ、やはりつながっていくのだろうと思います。

それでは、次に長久手町にお尋ねしたいのですが、長久手町は博覧会計画の途中で急に降ってわいたようにメイン会場がやってきたわけで、そういう意味では大変驚かれただろうし、準備期間も少なかっただろうし、大変なことだったのだろうと思います。そのメイン会場を負担された自治体として、会場運営や催事など、多くの市民参加があったと思います。特に「おもてなしボランティア」というような形で、たくさんの町民の方が参加された。それはどのような形で行われて、どのように成果を上げたのか。まず、そのことに絞って、町長の加藤梅雄さんにお尋ねしたいと思います。



(加藤)

長久手の加藤です。私どもは、今お話がありましたように、瀬戸市の海上の森から、いろいろな環境問題があり、長久手の地に博覧会主会場が移転してきました。そのことをお話ししますと長くなりますが、これは皆さんご案内のとおりです。

私はそのときに、この愛知青少年公園が、まさに今の博覧会場ですが、非常に起伏に富んでいますし、私は、小さい博覧会に行ったことがあります。過去のハノーバーの博覧会、あるいは日本では大阪の吹田の大阪万博以外、知りません。それらを見た場合にも、21世紀は環境を主体にした博覧会ということは、当時から標榜していたわけですので、環境的には全くこれは適地だと、ここで開催されたら素晴らしい博覧会になると思いました。

前のパネラーのセビリヤの市当局の方もおっしゃいましたし、ハノーバー市長もおっしゃいましたように、かつて過去にない環境の中で素晴らしい博覧会が開催されたと言われました。まさにこれは、私が考えていたように、設計をされた方、あの構想を作られた方、本当にそのアイデアとか、素晴らしい発想で計画された、見事なものであったと思います。今から思うと、やはりあの環境がなすべき、それをうまく活かした博覧会ができたのだと思います。

そこで、私ども4万5,000人の小さな町でこの世界的イベントが開催されたという、過去の博覧会史上にもないだろうと思います。私どもは、どうしても成功させなければ

いけないと、4万人町民が燃えたと思います。この長久手、「おもてなしボランティア」というものがすぐ発足しましたが、これも話が前後しますけれども、ボランティアのリーダーの方から役場の西庁舎の一室を貸してくれと言われてお貸ししたのです。その表札の一字一字を、「長久手ボランティアセンター」と、皆さん一人一人が一字ずつ書いて、みんなで作った。ですから、字は上手とは言えないのですが、真心がこもっているといいますが、やろうという意思が、そのボランティア室へ入るその表札を見るだけでも伝わってきます。

そんなことで、今日、今すごいパワーですが、この原点は、まさに長久手で博覧会が開催されるならば、何が何でも成功させなければならないという、熱い住民パワーがそこに生まれたということだろうと思います。

実は、昨日も私、間もなく閉幕ですので、長久手駐車場、南駐車場と2か所ありますが、ボランティアの方に、ちょっとお礼を言って回りましたが、「本当に私たちは幸せだった」と。みんな笑顔で、私は「ご苦労さんでした」と言っていたのですけれども、逆に「よかった」と、私どもが激励をしていただきました。「これからも頑張ってくださいよ」というメッセージをいただき、みんな笑顔でこの博覧会を終えるという、そういう感触を得たわけです。

それは今、豊田市長さんや皆さんがおっしゃったように、ボランティア活動というのは、やはり嫌々とか、人から、行政が押しつけたとか、そういう形でやってはならないわけです。間もなく2,100万人ぐらいいらっしゃると思います。世界各地、あるいは全国津々浦々から訪れた人に与える心、「ココロツタエ」という歌が博覧会の歌がありますが、まさに心を伝えなければ、来たときに悪い印象を与えます。本当に自分たちで心から「いらっしゃいませ」「お気をつけて行ってください」とか、「お帰りなさい」とかいうその言葉を発することが、大



成功の一つの要因であると思っております。

私どもがもう一ついちばん心配したのは、やはり交通アクセスの問題でした。これはまさに、行政がやらなければならない問題ですので、今のリニモも、今回の博覧会には本当に大きな役割を果たしたと思っておりますが、何もない無から有を生じたわけです。また、新しい道路も造っていただきましたが、この短い期間、本当に瀬戸市の海上の森からこちらへ移ってから、万博の開催までの期間というのは本当にわずかでしたが、みんな燃えた。私ども町当局の間はもちろんですが、町民の皆様方、地主の皆様方がご協力いただいたと、これも先ほどのボランティアと同じように、すごい力になってご協力いただいた。それで今回大成功と言っていると思っておりますが、あと4日ばかり、何事も事件のないように願っていますけれども、大成功のうちにこの博覧会を終えることができるなど、私自身本当に喜んでおりますし、ほっとしています。

今回、私どものボランティア活動が成功、そして気持ちよく皆様方を長久手町民が迎えた、このボランティア活動というのは、そこに原点があったことを申し上げたいと思っております。

(木村)

ありがとうございます。豊田市にせよ、長久手町にせよ、それぞれの市民が積極的・自発的に参加された。そういうことでボランティア活動が成り立ってきたのだということのようですが、それがたまたま博覧会のお祭り騒ぎの中で、一過性のにぎわいとしてあったのでは困るわけです。豊田市の先ほどのお話にもありましたが、市民参加の仕組みが非常に大事だと思います。そういう意味では、長久手町としては、行政のサイドから市民参加の仕組みをどのようにお作りになったのかということ、事例があったら少し教えていただきたいのですが。

(加藤)

この「おもてなしボランティア」を通じて、もとよりこのボランティア活動というのはいろいろな顔がありまして、高齢者福祉から子供たちの問題からありますが、今回、一丸とならなければこの大きなイベントを乗り越えられないということで、連携と申しますが、非常にネットワークがよくできまして、皆さんが一致して一つの目的に向かった。そういうことで、新たな、今まで別々に行っていたボランティア活動が、一つになる。一つになると大きなこともできる。また、個々のボランティア活動も重要だと思っております。

そういう意味において、私どもは「まちづくりセンター」というものを建設しました。したがって、これからはこのパワーを活かしながら、皆様方がこのまちづくりセンターの拠点をひとつ大いにご活用いただいて、今回の博覧会のこのボランティア活動の素晴らしい余韻を残しながら、新しいまちづくりに向かってご努力願ったらなど、考えています。

(木村)

ありがとうございます。よく分かりました。

地域の人々、自治体がさまざまな工夫で市民参加の促進をしていくということであったわけですが、今回の愛・地球博ではボランティアセンターが大活躍をしました。これは多分博覧会史上初めて、市民参加で立ち上げたボランティアセンターだったのだと思います。そのような構想が、どうしてでき上がって、どのように展開していったのかということ、ボランティアセンター代表の榎田勝利先生からお話をいただきたいと思っております。

博覧会へのボランティア参加の意義、今後の展望なども含めて、まとめてお話を頂戴できればと思っております。どうぞよろしくお願いたします。



(榎田)

愛・地球博ボランティアセンターの榎田と申します。

21世紀はボランティアの世紀だといわれるようになりました。国境を越えて、市民のボランティア活動、あるいは地域が世界とネットワークをする、あるいは連帯をして、地球的な規模のさまざまな問題を解決するという大きな動きが出てきました。ある学者は、そのことを「連帯革命」(Association Revolution)という言葉で呼んでいます。

そのような状況の中で、私たち日本の社会ではどうだったのだろうかということが出てきます。その中で、1995年に、皆さんもご存じのように、阪神淡路大震災の活動が注目されると思います。述べ百数十万人のボランティアが神戸に駆けつけて、救援活動を行った。もう日本の社会の中では、歴史的にもすさまじいボランティアの活動があり、そしてその活動が評価されたということになります。そして、その成果がそのまま日本の政府を動かして、1998年には、ボランティアを推進する「非営利活動推進法」(NPO法)というものができた。これも日本の政治の歴史の中では、初めての大きな動きでした。

そして、2001年は、皆さんもご存じのように、国連が「ボランティア国際年」ということで、世界100か国を超える国々で、ボランティアを21世紀の大きなエネルギーにしようという大きな動きがあった。それと軌を一にして、愛・地球博では、市民

参加、ボランティアを一つの大きな柱にしようと、まさしくタイムリーな、時宜を得た取り組みを、私たちはすることになったわけです。

さて、愛・地球博ボランティアセンターは、どのような組織になったのかということですが、博覧会協会はあるわけですが、博覧会協会の一部の部局ではなく、市民によって立ち上げた自律的な組織として活動していこうということで、任意団体だったのですが、一つの組織としてボランティアセンターを立ち上げた。このことは、博覧会以後の活動の継続に大きな意味を持つわけです。そして、2002年12月にボランティアセンターを設立しました。

そこで、そのボランティアセンターの基本的な理念はどうだったのだろうかということですが、一つは、ボランティアというのは、国の内外から会場を訪れるときの最初の入り口でパンフレットを渡す、会場の地図を渡す。その最初の出会いの場をボランティアが作るわけです。そういう面では、ボランティアはいちばん万博の顔になるということ、私たちは常にボランティアの人たちと考え、笑顔で始まって笑顔で見送りをしましようということを基本にしました。いわゆる博覧会の来場者に、思い出や満足感が残るような活動をしよう。

2番目は、ボランティアというのは、ご存じのように、自発的な、個人の自発性に基いた活動であると。ですから、自ら考えて、自ら責任を持って行動することを基準にしよう。非常に単純なことなのですが、大変難しいことです。

3番目は、ボランティアというのは、だれでもできるのです。だれでも参加できる。そのボランティアが、参加をして楽しく、そして多くの出会いや学びがあるということ、これを基準にしよう。

4番目は、これが非常に大切なことなのですが、ボランティア活動を一過性のものとはせず、地域社会に継承されることを目指そう。いわゆる日本の社会の中にボラン



ティアの文化を作る、形成する一つのきっかけにしていこうということ、私たちは目指しました。その基本理念を実践するために、私たちは運営組織を作りました。経営母体である、NPOやNGOで言うと理事会に当たる経営企画委員会を作り、それもすべて市民のボランティアによって運営される。その委員会のもとに部会を作りました。

一つは国際部会。通訳とかガイドとか、国際的なプロトコールを中心にした活動を展開する国際部会。

もう一つは福祉。多様な人々が万博の会場を訪れるわけです。障害を持った方々、障害といっても、多様な障害者の方々が見えるわけですが、その方々にも、満足して、安心して、快適に万博で過ごせるように、そういうボランティアの活動をしよう。

そしてエコです。環境に優しいボランティア。環境を中心にしたボランティア活動の推進をしよう。

更に、県民・市民がもっともっと万博を理解して、そして積極的に参加できるように参加支援部会を作りました。これは啓もう・啓発・PRをする部門。

最も大変だったのが研修です。後ほど話しますが、約3万人のボランティアの研修をどうするかということで、これも大変な前例のないことを試みることになりました。

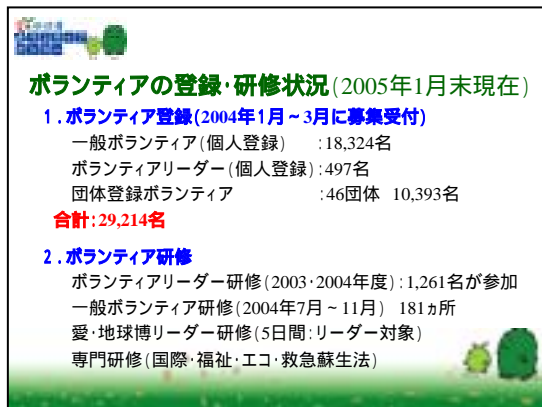
実際にボランティアの登録・研修状況はどうだったのかということ、少し皆さんに紹介したいと思います。

当初ボランティアは約半年間1万5000人のボランティアで運営しよう。そして、より長期で専門的なボランティアのリーダーとしての活動をしていただく約250名を目標にしましたが、私たちの予想を上回る、約3万人のボランティアの人が参加をしました。一般ボランティア、個人登録した人が1万8000人。ボランティア・リーダー250人が、約倍の497名。そして、団体登録、企業や学校などさまざまなNPO、ボランティア団体が団体として登録をする。

そういう活動で、トータルで3万人近くのボランティアの人が半年間、活動することになったわけです。

ボランティアの活動、もう少し登録者の状況を紹介しますと、ボランティアのこの3万人の活動を、愛知県下180か所を超えるところで、ボランティア研修をしました。このことが、全県下挙げて、各市町村を含めて、万博の意義、万博にボランティアとして参加するという啓もう活動には非常につながったと思います。ボランティア・リーダーの研修を行い、そして一般ボランティアの研修を行い、そして愛・地球博リーダーの研修をする。リーダーになるために、朝から夕方までの1日をのべ10日間、ボランティア研修をしたことも大きな活動でした。

更に、専門部会として、国際部会、福祉研修、エコ研修、救急蘇生法と、いわゆる真夏の万博会場ですから、倒れたり、あるいは熱中症にかかったりという方が出てくる。そういうことで、緊急に救急措置ができるようなボランティアも、トレーニングをすることになりました。

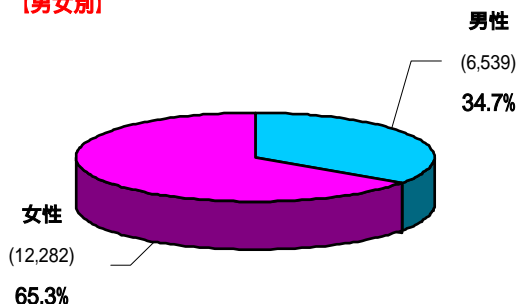


ボランティアの登録者はどんな人たちかというと、男性が約35%、女性が65%、そして、ボランティアの年代的な内訳を見ますと、10代(高校生)から最高85~86歳まで、年代層がこれだけの参加がありました。中心は50代以上のリタイアをした、あるいは熟練をした人たち、そして若者たちということがあります。



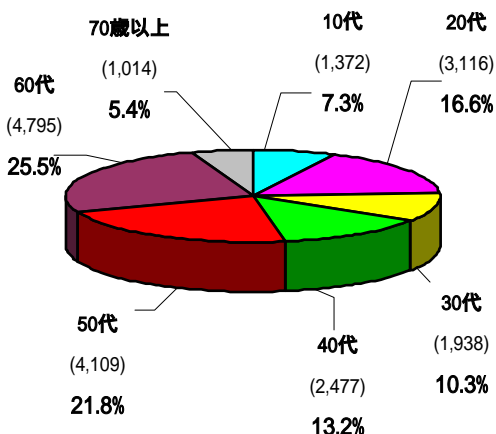
ボランティア登録者(個人)の内訳(2005年1月末現在)

【男女別】



ボランティア登録者(個人)の内訳(2005年1月末現在)

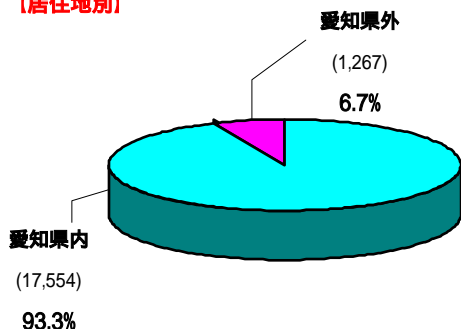
【年代別】



それを今度は居住地別に見ると、愛知県下が約 93%、愛知県民の方々がボランティアに多く参加した。残りの愛知県以外の方々は、約 20 県を越える地域からボランティアに参加をしたということで、これは交通費も大変だと思うのですが、それ以上に、万博に参加する意義を持たれた方だと思います。

ボランティア登録者(個人)の内訳(2005年1月末現在)

【居住地別】

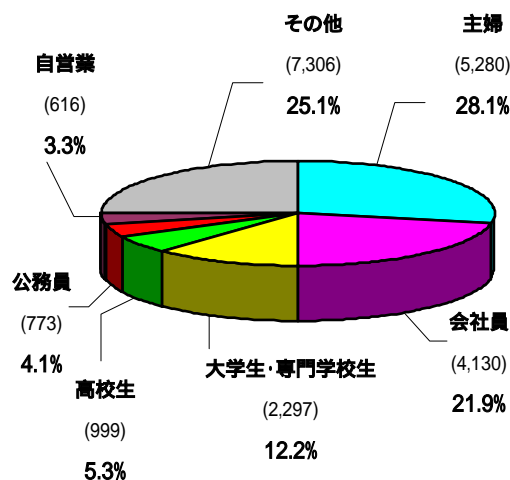


ボランティアの職業別に見ても、高校生・大学生から会社員、とりわけ主婦、主

婦の力はすごく大きいです。28%の方々が家庭の主婦であった。つづいて「その他」(25.1%)とありますが、この方々はリタイアをした人たち、会社とかいろいろなところ、組織を終えて、リタイアをした人たちが中心になったということです。約 4 人に 1 人がそういう 60 代以上の人たちで、この万博に参加をしたということになります。

ボランティア登録者(個人)の内訳(2005年1月末現在)

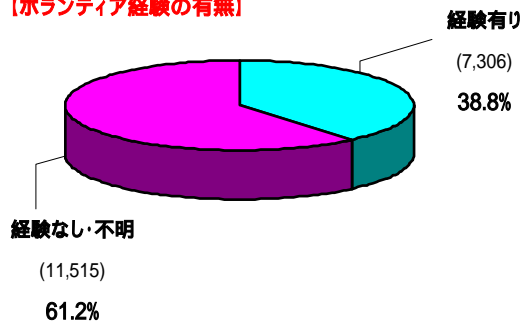
【職業別】



ボランティアの経験も、私たちは非常に当初から期待をしたのは、この万博のボランティアが、県民・市民にとって、最初にボランティア参加のいいきっかけを作ることを目指したわけです。約 6 割の方々が、万博で初めてボランティアの経験を持つことになりました。

ボランティア登録者(個人)の内訳(2005年1月末現在)

【ボランティア経験の有無】



ボランティアの活動を、少しビデオで紹介したいと思います。

これはゲート付近でちらしを配るボラン



ティア、最初に出会う人です。

あと、会場内での案内係。案内をするボランティア。

それから、「写真を撮ってください」という来場者に対して、シャッターを押すボランティア。

あるいは、ケア・センターで車いすを提供したり、あるいはそのケアをするボランティアのアレンジをしたりするボランティア。途中で足りなくなり、車いすもかなりまた、たくさん用意したのです。

あと、ベビー・センターでケアをするボランティア。

これも、美化、エコ活動です。ごみの分別をするボランティア。これも当初は大変でした。なぜこんなにたくさん分別するのかということになりました。

あと、エコ・ガイド。子供たちに、エコのガイドをするボランティア。これには約2万人近くの人たちが参加をしました。子供たちがボランティア体験をする体験ボランティアもたくさん行いました。子供たちにとっても、この万博でのボランティア体験というのは、将来に大きな意味を持つと思います。

こういうボランティア活動を推進して、ボランティア活動は今8月の31日現在、述べ9万2000人、そして1日平均、約600名のボランティアが活動する。そして、最終的にはのべ約11万人のボランティアがそれに参加し、ボランティアが活動した総時間数は約56万時間。万博の協会がフルタイムとして雇った人数から言うと、約7万人の人に当たる活動(仕事)をボランティアが担ったといえるのではないかと思います。

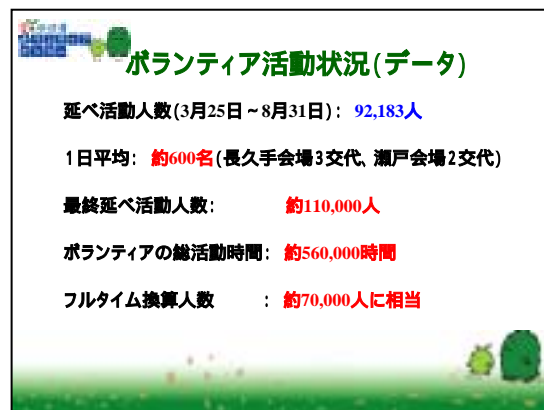
そういう中で、ボランティアが活動を行い、私たちはこのボランティア参加でどんな意義を持ったのかということを考えますと、ボランティアの参加が一般の市民・県民にとって、ボランティアに参加する素晴らしい動機づけやきっかけになった。同時に、実践から多くのことを学ぶことができ

た。

2番目は、万博を盛り上げるということで、さまざまな団体がネットワークを形成する。そして、共通の目的のもとに活動することができた。

3番目は、ボランティアの研修ということですが、さまざまな研修を行い、人づくり(人材育成)に大いに役に立った。このノウハウは後にも継承できるのではないかと思います。

4番目は、ボランティアセンターが自立した、独立した組織として活動したことが、この経験とかノウハウ、そして人(人材)が、後で私たちの愛知県、この地域社会に大きな担い手になりうるのだということを実感するようになりました。



そういう中で、今後、私たちはこのボランティア活動をどういう形で継承しようかということを考えています。ボランティア活動は、やりたい人はいっぱいいるのだけれども、実際にボランティアに参加していない。どうしてなのだろうか。市民の善意のある人たちはたくさんいるのだけれども、なかなか参加しない。それには、一つは装置が必要だと。それはボランティアセンターという装置であった。愛知県にも、何千というボランティア団体があるわけです。そのボランティア団体をより強化し、もっともっとボランティア社会を作っていくために、ナショナル・ボランティア的な要素を兼ねた、ボランティアセンターを今後作



っていこうと。万博の趣旨にも合うように、グローバルな視点で活動できる、そして愛知が拠点になってナショナルなレベルに、そしてグローバルなレベルにも参画できるような、そういうボランティアセンターを今後作っていこうということを、私どもボランティアセンターとしては考えています。

(木村)

どうもありがとうございます。博覧会の中・外でのさまざまなボランティア活動の在り方を、ある意味で日本的な風土の中で、大変苦労しながら展開してきていただいたということがよく分かりました。

では、引き続きまして、そのように各市町、それからボランティアセンターが随分苦労して市民活動を支えてきた、そして市民がどんどんと自発的に動くようになったということなのですが、ここでもう1回小川さんにお尋ねしたいのです。小川さんが冒頭でおっしゃっていたような思いが、実際にどのように市民に受け止められた、あるいは受け入れられ、支えられたとお考えか、その辺の苦労話を少しお願いしたいと思います。

(小川)

冒頭、お話しさせていただきましたように、今回、「時代のエンジン」としての市民よ集まれ、という呼びかけをしました。木村先生のほうから、市民参加というのはいろいろな形があることをお話しされていますが、市町村における参加、そしてまた運営ボランティアという形の参加、いろいろな形があるのですが、今回万博史上初ということでその中心に据えてきましたのは、国でもなく、企業でもなく、市民が地球的な課題に取り組む。その力をこの万博で見せよう。そういう力を私たち人間は、個人は持っているのだということを見せようという事業です。

そういう問いかけで公募をしました。一次公募、二次公募としていったのですが、

結果的に、多分皆様のお手元の袋の中にこういうペーパーがあると思うのですが、235のプロジェクトが、日本、そしてまた世界から集まってきたというのが一応結果です。

この235のプロジェクトというのは、実はテーマは「盆栽から戦争まで」と言っているのですが、本当に多様です。まさに市民の多様性そのまま、この235のプロジェクトに現れています。思想的にも、あるいは立場的にも、技術のレベルでも、全く多様な市民が万博に集まって来てくれたということです。

そして私は実はこの愛・地球博において市民力を見せるのに当たりまして、どのように見せようかなと思ったときに、今までの万博というのは、私たちの目の前、これから起きることを見せてきたわけです。あした・あさっての素晴らしい世界というものを見せてきた。そのための技術的ないろいろな開発・ノウハウを見せてきた。それもすごく大事なことで、今回の愛・地球博も、まさに技術的イノベーションを見せていますが、私たちの時代のエンジンとしての市民の力、市民がプロジェクトを立ててそれを見せるというのは、実は前ではなくて、私たちの横を見せようという試みなのです。

つまり、同時代に地球に生きる多くの人たちが、それぞれのやり方でこの地球を愛している。その姿を見せようというのが大きなねらいです。テーマとして、「地球の愛し方」というキーワードを作ったのですが、さまざまな形の地球の愛し方、それが世界や日本各地いろいろなところからやってきた。それがまさに、この235のプロジェクトなのです。

この半分は、この愛知県を中心とした中部地域の方々が作ったプロジェクトです。そしてまたその半分は、日本全国からやってきたプロジェクトです。そして、さらにこの235の総数の半分は、世界と連携しているプロジェクトです。そういうものがこの地域にやってきた。



先ほどお話にあったハノーバーで起きてきた、NGOの参加やワールドワイド・プロジェクトは、長久手会場にある「地球市民村」という形で、新しく継承・発展されたのではないかと考えています。それに加えて、この愛・地球博において、もっと細分化された、個人のいろいろな力が地球の課題を解決していくというオリジナルのプロジェクトとして、235の市民プロジェクトを掲げる瀬戸会場の市民パビリオン&海上広場が誕生したといえると思います。

そんなことを偉そうに言っている、実は万博が始まる前は、本当にこういうプロジェクトが万博のいわゆるソフトというか、コンテンツとなるのかならないのかというのは非常に不安でした。つまり、この235のプロジェクトをどのように見せるかというと、基本的には「対話(ダイアログ)」という形で見せたのです。「対話劇場」というものを市民パビリオンの中に置きまして、そこで入れ替わり立ち替わりいろいろな人がメッセージを出していく。そして、その隣には「対話ギャラリー」というものがあり、そこではプロジェクトを始めた本人が説明をしていくという、対話型展示という形で、広場でのワークショップを含めて、すべて基本的には対話というスタイルを取って見せていったのです。果たして、この対話というスタイルが本当にこの万博に定着するのか、つまり、対話をするには時間がかかるわけです。

今、ご存じのようにみんな次から次に、早く次のパビリオンへ行きたいというのが、万博の中での皆さんの純粋な気持ちです。1館でも多く見たいという、そういうファーストな空間の中で、人の話をじっくり聞く、人と一緒に、ともに作業をするとか体験するという非常にスローなコンテンツ、私は「スロー・エキスポ」と呼んでいるのですが、そういうものが本当に成り立つのかどうかというのは非常に疑問であり、一部協会からも批判をもらったこともあります。市民自身も不安で、自信もなかったと

ころもあります。私自身も、実際オープンするまでに寝られない日々が随分続いて、実は余談ですけども、約十数キロやせることができたので、万博はダイエットによく効くと思います。ぜひ、開催地の方はこれから、ダイエットの万博に参加していただければと思います。

でも、実際オープンしましたら、最初のご存じのように愛・地球博全体の来場人数が非常に少いスタートでしたが、当然、瀬戸会場の市民パビリオンも少なかったことは事実です。しかし、来られた方が最後まで話を聞いていくのです。あるいは、最後まで一緒にワークショップをやっていく。そういうことが見えたときに、これはいけるかもしれないと思いました。そして、現状全体人数が増えていく中で、本当に多くの方が人と対話をし、経験を共にし、共にものを作るということを楽しんでいます。

そして、なおかつ素晴らしいことは、リピーターがものすごく多いということです。「対話劇場」で、私に「今日、小川さん、50日目なの、私」と言われた人がいました。市民パビリオンでは毎日コンテンツが変わっていきますから、それを毎日のように味わいに来る、楽しみに来るといった市民がいっぱいいるということ。それは僕は非常にびっくりしたし、なによりうれしいことでした。

そして、そういう中で、来場された市民が参加した市民と出会って、それぞれの人生が変わっていくという現象が起きています。またたとえばこの万博のためにあるプロジェクトを立ち上げるのに、自分の青春時代に思っていたアジアへの思いを、もう一度形にしたサラリーマンがいます。それによって、彼の人生は大きく変わった。あるいは、そういうものを見て「私もやりたいな、そういう話はとても楽しいな」ということで、何度も何度も来るうちに、実はその人は引きこもりだったのですが、それが治ってしまったという人もいます。

つまり、僕は市民参加の一つの大きなこ



とは、個人の生活の質が変わるということがあると思います。そして、この個人の生活の質が変わることで、実は今回この愛・地球博の中では、万博の質が少し変わってきているのではないかとも思っているのが、現状の気持ちです。

(木村)

ありがとうございます。今、皆さんのお話を聞きながら、やはり博覧会が変わったということを実感させられました。それは何が変わったかということ、見せる博覧会から、ともに行動する博覧会へ変わっていったのだと、そういうことなのだろうと思います。

では、本当はもっともっとたくさんのお話を聞きたいのですが、時間がやってまいりましたので、第2部はこれで終わって、これまでの議論を深めて第3部、これからの博覧会と地域づくりの問題につないでまいりたいと思います。